

(Sine-usu 碑、北面第五行に磨延賧が尙其父の在世中、而して突厥の烏蘇密施可汗を滅さざる以前に於て既に「余は、余の民なる Toquz Oryuz の民を集めたり」と記せり) 八〔姓〕Oryuz が何れの地に據りしかは固より知る可からざれど、然も九〔姓〕Tatar と共に Selenga 河を距ること遠からざる地方に在りて Uiyur と接觸を保ちしものなることは、茲に引きたる碑文東面第三行の記事によりても推察するを得べし、此の八姓 Oryuz の回鶻が何時より出現したるかは知り得べからざれど、假に突厥碑の建てられたる時代に於ても既に存在したるものと認むる時は、先きに正鵠を得たりと認めたる Thomsen 氏の説即ち Oryuz は九姓より構成せられたるが爲に Toquz Oryuz と稱せられたるものなりとの説に對しては、少しく制限を加へ、當時漠北地方に住みし Oryuz 部族中の九姓より成りし一團を稱して Toquz Oryuz と曰ひたるものと認めざる可らず、然れ共茲に注意すべきは Sakiz Oryuz なる團體は早く既に突厥碑時代に存したるものとするも、然も此の時代に於ては著しき勢力なかりしものか、同碑文には未だ一回と雖此の名は現はれず、而して此の碑文に於て、ただ Oryuz の名を以て記さるゝものは本論に於て論述したるが如く、常に Toquz Oryuz と同一の意味を以て用ゐられたるものなること疑無ければ、余輩が同碑文の記事と漢文の記載とを比較して、Toquz Oryuz は會要に記載せる九姓、即ち回鶻・僕固・渾・同羅等の九姓に外ならずと見たる結論に於ては動搖を生ずる無きこと之なり、從て Toquz Oryuz とは Oryuz 部中九姓より成りし一團を稱したるものなることを認むと雖、然も尙 Marguart 氏の説とは固より一致せるものには非ず、氏は Toquz Oryuz を以て Oryuz 中の回鶻が政治的中心たる藥羅葛・胡咄葛以下の九姓を構成したるが爲に生じたる名なりとし、余輩は却りて此の名を以て Oryuz 中の回鶻を始め僕骨・同羅・思結・拔野古等の九姓團體を稱したるものに外ならず